

身延山共栄ともの会公開講座（法華経講座）
第二講 法華経の基礎知識（その2）

令和2年7月20日

（復習） 第一講 法華経の基礎知識

I 『法華経』とは・・・

1、『法華経』の成立

① 大乘仏教の代表的な経典。大乘仏教の初期に成立した経典であり、誰もが平等に成仏できるといふ仏教思想の原点が説かれている。聖徳太子の時代（615年頃）に仏教とともに日本に伝来した。

★ 「最高の経典」・「諸経の王」

* 『法華経』以外の大乗経典

・ 涅槃経 「一切衆生悉有仏性」（あらゆる人に仏性がある）

・ 勝鬘経 「如来蔵」（衆生は如来を胎児として宿している）

* 「如来」の意味

仏教学者の中村元博士によれば、「タターガタ」（tathāgata）とは本来、「そのように行きし者」「あのよう

に立派な行いをした人」という語義であり、仏教・ジャイナ教・その他の古代インド当時の諸宗教全般で「修行完成者」つまり「悟りを開き、真理に達した者」を意味した語であるが、「如来」という漢訳表現には、

* 「世尊」の意味

「福徳のある者」・「聖なる者」の意味で、古代インドでは、師にたいする呼称として使われていた。

* 「十号」とは、「仏陀」の十の称号のこと

1、如来（によらい、tathāgata）
現実のままに現れて眞実を人々に示す者、眞実の世界に至り、また眞実の世界から来られし者を如去如来といふ。

2、応供（おうぐ、arhat）

尊敬を受くるに足る者をいう。阿羅漢。

3、正遍知（しょうへんち、samyaksambuddha）

一切智を具し一切法を了知する者。宇宙のあまねく物

事、現象について正しく知る者をいう。

4、**明行足**（みょうぎょうそく、vidyācaranāsaṃpanna）

『大智度論』に依れば、明とは宿命・天眼・漏尽の過去現在未来の三明、行とは身口意の三業、足とは本願と修行を円満具足すること、したがって三明と三業を具足する者をいう。

『涅槃経』に依れば、明とは無上正遍知（悟り）、行足とは脚足の意で、戒定慧の三学を指す。仏は三学の脚足によって悟りを得るから明行足という。

5、**善逝**（ぜんぜい、sugata）

智慧によって迷妄を断じ世間を出た者。好去、妙住ともいう。善く因より果に逝きて還らぬという意味で、無量の智慧で諸の煩惱を断尽し世間を脱出した者をいう。

6、**世間解**（せけんげ、lokavid）

世間・出世間における因果の理を解了する者。仏は世間の有情をよく了解することからいう。

7、**無上士**（むじょうし、anurā）

惑業が断じつくされて世界の第一人者となれる者。仏は衆生の中において最も尊き無上の大士なる意であるからいう。

『涅槃経』では「仏は無上士とも名付け、三宝中においては仏こそ最も尊上となす」と説く。

8、**調御丈夫**（じょうごじょうぶ、puruṣadamyasārathi）

御者が馬を調御するように、衆生を調伏制御して悟りに至らせる者。仏は大慈大悲を以て衆生に對し、あるいは軟語、あるいは苦切語・雜語を用いて調御し、時に応じて機根気類を見て与え、正道を失わしめない者であるという意。

9、**天人師**（てんにんし、śāstā devamanuṣyānām）

天人の師となる者。仏は正法を以て人間・天上の者を教導するから天人教師、すなわち天人師という。

10、**仏世尊**（ぶつせそん、buddho bhagavān）

煩惱を滅し、無明を断尽し、自ら悟り、他者を悟らせる者。眞実なる幸福者。仏は仏陀の略で智者・覺者の意、世尊とはあらゆる功德を円満に具備して、よく世間を利益し、世に尊重せらるるとの意で、世において最も尊いから仏世尊という。

② サンスクリット語の『法華経』

『サツダルマ・プンダリーカ・スートラ』（梵：सद्दर्मुत्पटीक

『Saddharma Puṇḍarīka Sūtra』「正しい教えである白い蓮の花の經典」の意の漢訳での総称であり、梵語（サンスクリット）原題の意味は、「サツ」（sad）が「正しい」「不思議な」「優れた」、「ダルマ」（dharma）が「法」、「プンダリーカ」（puṇḍarīka）が「清浄な白い蓮華」、「スートラ」（sūtra）が「たて糸：経」であるが、漢訳に当たってこのうちの「白」だけが省略されて、例えば鳩摩羅什訳では『妙法蓮華経』となった。さらに「妙」、「蓮」が省略された表記が、『法華経』である。「法華経」が「妙法蓮華経」の略称として用いられる場合が多い。

2、『法華経』の漢訳

・『正法華経』十卷二十六品

（竺法護訳、286年、大正蔵 263）

・『妙法蓮華経』八卷二十八品

（鳩摩羅什訳、400年、大正蔵 262）

・『添品妙法蓮華経』七卷二十七品

（闍那崛多・達磨笈多共訳、601年、大正蔵 264）

※「正」と「妙」↓正を超えた妙なる最勝の教え

II、「原始仏教」と「小乗仏教」と「大乘仏教」

①原始仏教（釈迦の仏教）*植木雅俊博士説

・原始↓「釈尊は人間」、「皆の善き友」

*「釈迦の仏教」↓「二度と生まれ変わらない世界に行くこと」↓「涅槃」

*「生きることは苦しみである」↓輪廻をしない

*「釈迦の仏教」は自己練磨や瞑想によって自己をよ

りどころとする宗教↓自灯明・法灯明

*釈尊滅後100年以内。以後分裂が始まる。

*権威主義的↓男性出家者中心主義↓隠遁な僧院仏教

*「教え」の分類・体系化が進む

*「出家」と「在家」の区別の厳格化

*教理中心主義・修行形態の確立↓出家主義の確立

*他者の救済よりも自己の修行完成が目的となる。

（利己的・独善的）

民衆を顧みない出家者の墮落を生む

紀元一世紀の頃には有料の葬儀が行われ、経済的基

盤を為していた。

・小乗↓「私は人間ではない、ブツダである」

*菩薩とは、釈尊と未来仏の弥勒だけ

・男性出家者は阿羅漢にはなれるがブツダにはなれない。

・在家は阿羅漢にはなれない。(在家非阿羅漢論)

・女性に絶対的に成仏できない。(女人不成仏)

・大乘↓「成仏」をあらゆる人に開放する

・「二乗不作仏」↓大乘仏教の差別思想

②「二乗作仏」とは

・二乗(声聞・縁覚)が成仏すること、法華経迹門で初めて説かれる。爾前の諸経では、自己の解脱に執着し利他に欠けていた二乗は、永久に成仏できないと仏から弾呵されたが、法華経迹門では、一念三千の法門(あらゆる衆生が成仏できるという原理)が説かれ、初めて成仏の記別が与えられたことをいう。(方便品)

・「十界」

仏・菩薩・縁覚・声聞・天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄

・十界は全て仏乗で包括される(一仏乗)

・「一仏乗」によって「二乗作仏」が許され、龍樹の『大智度論』において大般若経よりも法華経がすぐれていると述べている。

・天台大師智顛「一念三千論」・「十界互具」に発展

・天台↓「理の一念三千」

日蓮聖人↓「事の一念三千」

Ⅲ、「末法思想」と『法華経』

①「末法」とは？

・釈迦が説いた正しい教えが世で行われ修行して悟る人がいる時代(正法)が過ぎると、次に教えが行われても外見だけが修行者に似るだけで悟る人がいない時代(像法)が来て、その次には人も世も最悪となり正法がまったく行われな時代(末法)が来る、とする歴史観のこと。

・仏教の終末的歴史観(正法・像法・末法)

インド

正しい教えは次第に衰え、やがて滅びる、とする考え方は、仏教の初期の段階の経や律にすでに含まれている。そこでは正法はもともと千年続くはずだったが、女人の出家が許されたために正法が五百年になってしまった、とするものも多い。

大乘仏教経典には「末の世」という表現は様々な形で

現れる。また、こうした時代にこそ仏や菩薩が眞の法を説く、と強調する經典もある。

『大集經』（正式名『大方等大集經』）には「我が滅後に於て五百年の中は**解脱堅固**、次の五百年は**禪定堅固**、次の五百年は**誦誦多聞堅固**、次の五百年は**多造塔寺堅固**、次の五百年は我が法の中に於て言訟して白法隱没せん（**闢諍白法隱没**）」とある。つまり最後の五百年では仏教徒の間で論争が闘わされ、正しい教えが隱没してしまふ、とある。末法思想はこの大集經も典拠とする。なお釈迦の生没年は不明であり諸説ある。

中国

末法思想は、中国では隋・唐代に盛んとなり、三階教や浄土教の成立に深い関わりを持った。その早期の例としては、北齊・陳の天台宗二祖・南嶽慧思によって記された「立誓願文」に見られるし、隋代以降千年にわたって継続される房山雲居寺の石經事業も、末法思想によるものである。

日本

日本では平安時代の頃から現実化してきた。平安初期には（まだ一般的ではなかったものの）すでに最澄や景戒には、末法であるとの自覚が見られる。伝教大師が著した（とされる）が現在では偽書とみられている『末法燈明記』の中には「正像やや過ぎ終って末法甚だ近きあり法華一乗の機、今正しく是れその時なり何を以て知る事を得ん安樂行品にいわく末法滅の時なり」と末法が近づいている旨が書かれている。一般的には、特に**1052年（永承七年）は末法元年**とされ人々に恐れられ、盛んに経塚造営が行われた。この時代は貴族の摂関政治が衰え院政へと向かう時期で、また武士が台頭しつつもあり、治安の乱れも激しく、民衆の不安は増大しつつあった。また仏教界も天台宗を始めとする諸寺の腐敗や僧兵の出現によって退廃していった。このように仏の末法の予言が現実の社会情勢と一致したため、人々の現実社会への不安は一層深まり、この不安から逃れるため厭世的な思想に傾倒していった。

『末法灯明記』は、現在は末法であつて無戒の時代であることを強調するものであり、これは仏教が墮落し社会が混乱している時代に育つた鎌倉新仏教の祖師たちに大きな影響を与えた。

宗西や、曹洞宗を開いた道元は、釈迦在世でも愚鈍で悪事を働いた弟子もいたことや、末法を言い訳にして修行が疎かになることを批判した。そして修行に努めることを説いた。

鎌倉時代、法然を開祖とする浄土宗は末法思想に立脚し、末法濁世の衆生は阿弥陀仏の本願力によつてのみ救済されるとし、称名念仏による救済を広めた。一方で浄土真宗の開祖とされる親鸞は、師・法然の末法観を受け継ぎつつも、「正像末の三時には、弥陀の本願ひろまれり」「像法のとときの智人も自力の諸教をさしおきて、時機相應の法なれば、念仏門にぞいたりたまふ」（正像末和讃）と説く様に、正法・像法・末法といった時代を超えて受け継がれてきた念仏の普遍性を強調した。そして、同時期の、日蓮聖人も末法思想を真剣に受け止め、末法であるからこそ信じて行ふべき法を求め、法華経こそが正しい教えであるとし（法華一乗）、南無妙法蓮華経と唱えることを広めた。

室町時代後期、戦国時代に入ると、施設を要塞化、僧侶は武装、僧兵と化し、日々の修行よりも戦いに明け暮れ、人を殺めるようになり、浄土真宗や比叡山のように戦国大名と交戦したのもあった。また東大寺のように施設を拠点に利用され戦乱の舞台となり焼失した事例も少なくない。人々はこうした数々の出来事を見て、まさに末世が到来した、と判断した。

・『法華経』

「如来の滅後、末法の中においてこの経を説かんと欲せば・・・」（安樂行品十四）

（分別功德品十七）

・最澄撰『末法燈明記』（末法無戒）

・空海撰「正法千年の内は持戒得度の者多く、像法千載の外には護禁修徳の者少し、今当は是れ濁悪、人

は根劣悪なり。」
源信撰『往生要集』「夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり」

IV、日蓮聖人の『法華経』観

① 日蓮聖人の「末法観」

・「在世の本門と末法の初は一同に純円也。但し彼は脱、此は種也。彼は一品二半、此は但だ題目の五字也」

* 釈尊が靈鷲山（りようじゆせん）で説かれた法華経の本門の教えと末法の初めに弘まらるべき本門の教えとは同じように純円の（完全に円満な）教えである。ただ前者の釈尊在世の本門は「脱」の教えである。これは解脱を得させる教えであるのに対して、後者の末法の初めの本門の法華経は「下種」の教えなのである。

② 「末法下種」こそ日蓮聖人の救済観

・「是好良薬 今留在此 汝可取服（略）遣使還告」

* 是好き良薬を今（末法）留め此に在く。汝取って（題目受持）服すべし（下種）

* 日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。（報恩抄）末法万年の救済

・「末法為正」

* 正・像・末の三時の中にも、末法の始を以て正が中の正となす。「観心本尊抄」

正法・像法・末法の三時の中でも末法の初めをもっとも中心の対象としているのである）

* 問て曰く、法華経は誰人のためにこれを説くや。

答えて曰く、方便品より人記品に至るまでの八品に二あり。上より下に向つて次第にこれを読めば、第一菩薩、第二は二乗、第三は凡夫なり。安樂行より勸・提婆・宝塔・法師と逆次にこれを読めば、滅後の生を以て本となす。在世の衆生は傍なり。滅後を以てこれを論ずれば、正法一千年・像法一千年は傍なり。末法を以て正となす。末法の中には日蓮を以て正となすなり。「法華取要抄」

〔問〕 法華経はだれのために説かれたのであろうか。

〔答〕 まず法華経の前半の迹門の十四品をみてみると、方便品第二から人記品第九にいたるまでの八品について二つの見方がある。この八品をはじめから順序通りに読んでみると、第一には菩薩、第二に声聞

乗と縁覚乗の二乗、第三に凡夫を教化するために説かれたと考えることができる。しかし迹門の末尾の安樂行品第十四から勸持品第十三・提婆品第十二・宝塔品第十一・法師品第十と順序を逆にして読み進んでいくならば、この八品は正しく釈尊入滅後の人々を教化するために説かれたもので、釈尊の在世の人々の教化は傍意であることがわかる。そして釈尊の入滅後の中でも、正法一千年・像法一千年は傍意で、末法のために説かれたというのが真実であり、さらに末法の中でも日蓮が正意である。

＊今本時の娑婆世界は、三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり。仏すでに過去にも滅せず、未来にも生ぜず、所化以て同体なり。これ即ち己心の三千具足、三種の世間なり。「観心本尊抄」

今 本時という絶対時間に関き顕わされた娑婆世界は、その根本の災いである火災・水災・風災を超越し、また成劫・住劫・壞劫・空劫という雄大な循環を超越した永遠の浄土なのである。久遠実成の教主釈尊は、もはや過去世において入滅したこともなく、将来の世にも生まれ変わることはない。(このように法華経を説く教主釈尊は絶対にして永遠の仏陀であり、) しかも教化を受ける者もその永遠の釈尊と一体なのである。ということこそ、凡夫の自己の心に三千の法界を具えているということであり、国土世間・衆生世間・五蘊(ごおん)世間という三世間を具えているということである。

【一講のまとめ】

- ① 大乘仏教の中に属す『法華経』の成立過程を知ることが、その内容が私たちにとって何を意味するかを知ることが出来る。
- ② 初期の原始仏教は、釈尊在世のものであり、釈尊個人の「解脱」が目的であり、その普遍的な要素は決して目的ではなかった。(梵天勸請)
- ③ 釈尊滅後、原始仏教が権威主義を背景とした教理中心主義に発展する中で「小乗仏教」の体系化が進んだ。
- ④ 「小乗仏教」に至って、釈尊は「神格化」され、在家非阿羅漢論や女人不成仏という男性出家者中心の教団が成立した。
- ⑤ 「大乘仏教」の誕生は、小乗仏教の限られた範疇ではなく、時代と共に多様性に対応することが求められた。中でも『法華経』は小乗、大乘という区分、時には対立を乗り越えて、いわゆる「一仏乗」に帰したと考えられる。(中国 万善同帰経) 多様性に対応するということとは、どちらか一方を否定するのではなく、並存

することに眼目が置かれた。それに比べて、中国では般若経や維摩経は、方等弾呵経と呼ばれ、小乗を叱り飛ばす（全否定）する教相を展開した。（仏教統合）

* アシヤカ王朝の時代に、教団（サンガ）の分裂を回避するため、新たに「破僧の定義変更」が行われたとする説がある。

「釈迦の教えについて互いに違った考え方や解釈を持つていて、**同じ領域内に居住し、〈布施〉**や**〈羯磨〉**をみんなと一緒にやっている限り破僧ではない」（共同儀式）

〈布施〉一ヶ月に一度の反省会

〈羯磨〉サンガの会議

* お釈迦様の教えに背く教義を唱えること（破法輪）
* 儀式（現在の法要など）を一緒に行わないこと（破羯磨）

⑥ 「大乘仏教」は「悟り」の可能性を在家者にも広く開くという志向性の高まりによって誕生した。「原始仏教」、「小乗仏教」では仏弟子は「阿羅漢」にはなれるが「ブツダ」にはなれない。しかし、「大乘仏教」では、「出家も在家を問わず誰もがブツダという最高の位置に到達出来る」という新たな理論が展開されるようになった。（成仏思想）

（在家が出家者と同じ修行が出来るという、修行方法の多様性と解放）

* 「ブツダ」はただ一人↓「ブツダと同じ修行をすればブツダになれる」（菩薩行）

* 「ブツダ」は過去世ではスメーダという青年で、燃灯仏のもとで成仏の誓願を立てた。それを聞いた燃灯仏は彼が将来必ず覚るといふ予言（記別）を授けた。（授記）

* 「菩薩」とは「菩提薩埵」（Bodhi-sattva/satta）の略称で、sattva/satta は「生ける者（人間以外も含む）」を意味し、「衆生・有情」と漢訳される。つまり、Bodhi は「覚り」を意味するから、「菩薩」とは、「覚りを求める衆生・覚りが確定した衆生」を意味する。

* 「大乘仏教」の特徴として「三身論」を展開した。

・ 「法身」↓ブツダの覚った真理の法・その肉體

・ 「報身」↓修行の結果、その法を覚ることの報いとして仏となった身

「忘身」↓衆生を救済するために、衆生に応じて現す身↓『法華経』

⑦ 「末法思想」の影響によって、「大乘仏教」台頭の土壌が出来上がった。「鎌倉仏教」の各祖師は、それぞれの「大乘仏教」受容姿勢によって「衆生救済」を展開した。このように、「鎌倉仏教」の各祖師は皆、「衆生」中心の思想体系（末法観）を確立した。

* 「悟り」から「救済」へ

* 道元上人↓修行↓禪

* 法然上人↓「称名念仏」↓「捨しや閉へい閣かく拋ほう」

↓西方浄土

捨閉閣拋とは、末法の衆生の機を末法極悪の凡夫と規定し、末法極悪の凡夫であるがゆえに、難行たる聖道門を捨てよ、閉じよ、閣（お）け、拋（なげう）てと一掃し、易行道・正行としての称名念仏における他力の信心を勧めること。

* 親鸞聖人↓「絶対他力」↓「弥陀往来」

* 日蓮聖人↓「唱題」↓「妙法五字受持」↓靈山往詣

「今本時」↓「娑婆世界」↓「仏国土」↓浄土

今本時という絶対時間に開き顕わされた娑婆世界は、その根本の災いである火災・水災・風災を超克し、また成劫・住劫・壞劫・空劫という雄大な循環を超克した永遠の浄土なのである。

⑧ 『法華経』をどう受け止めるのか？

i 滅後末法の法華経とは**釈尊の現在を「今」として**受

領する

ii 『法華取要抄』に「逆次に之を読めば滅後の衆生を以て本と為す」（定八一三頁）と述べられている。

「**逆次に読む**」とは「流通分の心」をもって法華経を読むことである。

iii 末代の法華経信奉者は「**信**」によってのみ「**仏慧**」（ぶつえぶつて）**||**（仏陀の智慧）を受領することができる

iv 『四信五品鈔』に「**以信代慧**（いしんだいえ）（信を以って慧に代う）」（定一二九六頁）と述べられている。仏教における得証のための基本的修行である三学、即ち戒・定・慧を修することについて、日蓮聖人は戒・定は慧に集約されるところとして慧の一分に限るとし、末代の凡夫はその慧にも堪えないから、**信の集中によって智慧の修得に代えよ**とされている

- のである。
- v 仏道成就という一大事を忘れて学的遊戯にふけることをいましめたものであり、「信を以って慧に代う。信の一字を詮と為す」（定一二九六頁）といい「仏道に入る根本は信をもて本とす。たとひきとりなれども信心あらん者は鈍根も正見の者也。たとひきとりあれども信心なき者は誹謗闡提の者也」（定三九二頁）ともいって「**無解有信**」を教える。
- vi 『法華経』という物語の中に**自分**を見つける
 （例）信解品に登場する「窮子」や「威徳なき顔色の悪い男」とは誰？自分？
- vii 『法華経』に説示された物語を現代に見る
 （例）五百弟子受記品の譬え話で、貧しい男になぜ最初から宝石の場所を教えなかつたのか？
- viii 『法華経』に込められた「ブツダ」の祈りと「自分」
 とは？
- ix 「共に生き、共に栄える」↓「共に」をどう理解するか？（誰と・・・？）

第二講 法華經の基礎知識（その2）

I 『法華經』と『諸經』との比較

① 法然上人と『選択本願念仏集』

・ 末法においては称名念仏だけが相応の教えであり、聖道門を捨てて浄土門に帰すべきで、雑行を捨てて念仏の正行に帰入すべきと説いている。それまでの観想念仏を排して阿弥陀仏の本願を称名念仏に集約することであり、私教を民衆に開放する

・ 善導『観経疏』↓「本願念仏」

念仏は阿弥陀仏の本願であるから誰でも成仏出来る

（他の成仏の行の可能性を残す）

・ 「選択本願念仏」は阿弥陀仏が選ばれた絶対唯一の本願であるから、他の行では往生は不可能である。

・ 「西方浄土往生」という人間の「死」に対する観念が中心となった。

・ 衆生が「救済」されるためには、他の諸經、諸行を廃し、ただ「称名念仏」の行を行うことで西方浄土への往生が叶い、その阿弥陀仏のもとで、その本願に出会い「仏に成る」ことが出来るとした。

★ 日蓮聖人の対処

* 浄土教がそれ以外の聖道門（しようどうもん）を「捨てよ、閉じよ、閣け、抛て」（捨閉閣抛）と指示しているけれども、末法の衆生を救済するのはどちらであるかという問題をなげかけている。即ち末法の衆生は教主釈尊の真意を把握しきれず、つまり誹謗正法の機で充滿している。それに対して浄土教は阿弥陀仏の四十八願中、第十八大願に十方衆生救済を語り示しているにもかかわらず、「唯だ五逆と誹謗正法の者を除く」と述べているのであるから、衆生救済は貫徹されていない。

② 『無量寿經』（浄土三部經）

ある国王が世自在王仏のもとで出家し法蔵菩薩と名乗り、偈文（「讚仏偈」）を作り師を讚嘆し、諸々の仏の国土の成り立ちを見せて欲しいと願いを述べ、その仏国土より優れた点を選び取り、發願（ほつがん）し、五劫の間思惟して行を選び取った。願と行を選び取った法

藏菩薩は、師に向かい四十八の願（四十八願）を述べた。続けてこの願の目的を述べ重ねて誓った（「四誓偈（重誓偈・三誓偈）」）。そして兆戴永劫にわたり修行し、願が成就し、無量寿仏（阿弥陀仏）と成り、その仏国土の名が「極楽」であると説かれる。願が成就してから十劫が経っていて、阿弥陀仏の徳とその国土である「極楽」の様子が説かれる。（菩薩修行に最も適した仏国土）

私が仏となる以上、（誰であれ）あらゆる世界に住むすべての人々がまことの心をもって、深く私の誓いを信じ、私の国土に往生しようと願って、少なくとも十遍、私の名を称えたにもかかわらず、（万が一にも）往生しないということがあるならば、（その間、）私は仏になるわけにいかない。ただし五逆罪を犯す者と、仏法を誇る者は除くこととする。（第十八念仏往生の願）

わたしが仏になるとき、すべての人々が心から信じて、わたしの国に生れたいと願い、わずか十回でも念仏して、もし生れることができないようなら、わたしは決してきとりを開きません。ただし、五逆の罪を犯したり、仏の教えを誇るものだけは除かれます。

*『阿弥陀経』（参考）

シャーリプトラよ。お前の心においてどう思うか。どういうわけで、一切の諸仏に念じ護られていると名づける経と名づけるのか。もし、善男子・善女人がおり、この、諸仏の説くところの阿弥陀仏の名およびこの経の名を聞くとするならば、このもろもろの善男子・善女人は、みな、一切の諸仏に念じ護られているところとなり、みな、この上なく正しい悟りより退転しないようになし、なとするためである。これゆえに、シャーリプトラよ。おまえたちは、まさに、私の語および諸仏の説くところを信受するべきである。シャーリプトラよ。もし、人がいて、願いを起こそうとする人、もう起こした人、またはいまから起こす人、阿弥陀仏の国に生まれようと欲せば、このもろもろの人ら、みな、この上なく正しい悟りから退転しないようにすることができ、かの国土において、もしはすでに生まれ、もしは今生まれ、もしはこれから生まれるだろう。ものゆえに、シャーリプトラよ。もろもろの善男子・善女人とは、もし道理を信じるものがあるならば、かの仏国土（極楽浄土）に生まれようととも願いを起こすべきである。

*『観無量寿経』（参考）偽書説あり

阿闍世という名の太子が、悪友の提婆達多にそそのかされて、父の頻婆娑羅王を幽閉し餓死させようとした「王舎城の悲劇」を導入部として、王の後である韋提希夫人の願いにより釈迦が、極楽世界や阿弥陀仏、観音・勢至の二菩薩を観想する十三の観法を説く。そして、極楽世界に往生する者を「上品上生」から「下品下生」まで九品に分類し、最後に釈迦が阿難に向って「無量寿仏の名号を、常に心にとどめ続けよ」と説く。

※法然上人は、この「観想念仏」を否定して「称名念」のみを認めた。

*「ブツダ」を「阿弥陀仏」に変身させた。

*『法華経』は「ブツダ」を「久遠実成の仏」として再生させた。

*「取捨選択」↓「浄土門の正行である念仏」

*『無量寿経』↓「念仏」↓排他的↓「捨閉闍抛」

*『法華経』↓「二乗作仏」↓統合性↓「一仏乗」

「方便」という「巧みな手法」によって、何かを否定排他するのではなく、全てを統合した。（開会思想）

（譬喩品の大白牛車↓一台の贈り物↓一乗）
（化城喩品の道筋↓一本道↓一乗）

★日蓮聖人の対処

*『無量寿経』は天台五時教判中の第三方便等部に属する方便権教であり、教主阿弥陀仏も娑婆世界とは無縁の仏で、その救済力も無力であると批判する。

③「この世とは別の世界が存在する」（極楽浄土）

いまをさること十劫の昔、阿弥陀仏は成道して西方十万億の仏土をすぎた彼方に浄土を構えられた。そして、現在でも、この極楽で人々のために説法している。

この極楽という仏土は広々としていて、辺際のない世界であり、地下や地上や虚空の莊嚴は微をきわめ、妙をきわめていいる。この浄土にある華池や宝楼、宝閣などの建物もまた浄土の宝樹も、みな金銀珠玉をちりばめ、七宝乃至は百万の宝をもつて嚴飾されている。しかも、それらは実に清浄であり、光明赫灼と輝いている。衣服や飯食は人々の意のままに得ることができ、寒から暑から、まず、気候は調和し、本当に住心地のよいところである。また、聞こえてくる音声は、常に妙法を説くがご

とく、水鳥樹林も仏の妙説と共に法音をのべる。したがって、この浄土には一切の苦はなく、ただ楽のみがある。
*「私たちはまだ菩薩になっておらず、これからブツダに出会って菩薩になる」

*お釈迦さまの入滅後、五十六億七千万年後に弥勒菩薩が現れて次のブツダとなる・・・
そうではなくて、何とか直ぐにブツダに出会える方法として、ここは別の世界の存在を想定した。

◎「極楽往生」↓「菩薩行」↓「ブツダになるための行」
「死」は「極楽往生」へのプロセスであり「別の世界への入り口」

◎『法華経』では、過去世において私たちは既にブツダと出会っているのだから、私たちは既に「菩薩」である。だから、別の世界を想定するのではなく、現時点において日常が「菩薩行」であると捉える。(般若経と違ふところは、法華経を受持するという絶対的信が必須条件となる)*「本覚思想」欄参照

また「死」は終末ではなく、時間の経過の一部分に過ぎないから、未来世においても同じく「菩薩行」は継続されると説く。
では、何時ブツダになるのか？
ブツダを覚りの到達点と捉えるのではなく、過去世の「誓願」による「菩薩行」こそブツダであり、「菩薩の行を行うブツダ」と共に人間（凡夫として）が存在し「生老病死」の濁世に生きる。

④ 目的は「覚り」なのか「救い」なのか？
*「念仏を唱えて、西方浄土でブツダと成る菩薩行をする」これが、「浄土教」の真髄である。しかし、衆生は菩薩の修行をすることよりも、「浄土には一切の苦はなく、ただ楽のみがある」、「極楽」に往くことが本意として「念仏」を唱えるようになった。

この衆生の心中を推し量って、親鸞上人の「絶対他力」の「専修念仏」が誕生した。「念仏を唱えて浄土の阿弥陀仏に会いに往く」を更に昇華させ、「阿弥陀仏の方からこの娑婆世界にお迎えに来てくれる」と示した。

⑤ 「大日経」を依経とする「真言宗」の考え方
* 私たちがどうしたらブツダになれるかという問題は解決しており、「自分がすでにブツダであることを自覚すること」が必須作業となる。すでにブツダであるから「ブツダとしての活動をしなくてはならない」

それが、「鎮護国家」、「現世利益のための祈祷」など
実利的な仏教へと向かった。

★日蓮聖人の対処

＊『唱法華題目鈔』では明瞭に「大日経を法華経に対す
れば、大日経は不了義経、法華経は了義経也」（定一
九七頁）といい、密教批判を加重して遂には台東両密
を合せて真言亡国と評語された。

＊「本覚思想」の影響

「本覚」とは、衆生に備わっている「仏に成る可能性」
を認める思想であったが、「煩惱即菩提」、「生死即涅
槃」であるから「修行は不要である」という論に至っ
た。（ブツダには修行は不要、ブツダは菩薩ではない）

★日蓮聖人と「本覚思想」

＊法華経迹門は衆生の理性を開顕する故に、煩惱具足の
凡夫がそのまま仏と同体である。しかしこれは凡夫が
仏を具すという理具の法門であるゆえに理性において
同体を論ずるにすぎない。本門において仏の久遠実成
が開顕されて初めて真の十界互具・百界千如・一念三
千が究竟し仏界具九界の事具が成就する。しかし凡夫
と仏が無媒介に相即するのではなく、仏の慈悲を受領
するには信が絶対条件となる。日蓮聖人は『観心本尊
抄』に「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に
具足す。我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の
功徳を譲り与えたまふ」（定七一頁）と受持の信を
説示されている。五字の受持によって教主釈尊を己心
の所具とすることが法華経の成仏であり、ここに「所
化以て同体」の世界が実現するのである。

⑥『般若経』と「空」の思想

＊菩薩乘を一乗と表現し、二乗は成仏出来ない。

↓「成仏」は菩薩しか不可能

★日蓮聖人の『般若経』観

＊般若経の中には二乗の所学の法門をば開会して、二乗
の人と悪人をば開会せず。観経等の経に凡夫一毫の煩
悩をも断ぜずして往生すと説くは、皆爾前の円教の意
也」（定六四頁）といい、『浄名』『般若』等には確か
に悪法や二乗の法の開会はあるが、それは爾前の円と
いう不完全な中での開会であり、法華の円教に比べれ
ばはるかに低劣で、人開会もない以上、その法開会も
真の法開会とはいえず、結局開会は法華経に限るとい
う立場をとるのである。

*「私たちは過去にすでにブツダと出会って、世眼を立てて菩薩となり、そのあと長い生まれ変わり死に変わりの中で、ひたすら日常的な善行を積むことで、自身ブツダとなり最後には涅槃に入る。」

*「善行」↓「業」（業とは人間の行いのこと）

原始仏教では「業」は「煩惱」であり、釈迦は輪廻を断ち切るためには、善いことも悪いこともしてはいけない。だから、自分を切り所とし、他者の為には何かをしようとすることを「業」として退かした。

*「業」は、この世界を超えた超越的、神秘的要素としてのエネルギーとなり、衆生をブツダとする崇高なシステムとしての概念をもった（縁起）新たな「空」の思想として善行の功徳を縁起という神秘的要素で説明して肯定した。

↓「**回向**」（**禪の修行に取り入れ、各宗の法要儀礼に影響を与えた**）

*超越的・神秘的↓「写経」↓「新たな救いの要素」

II、『法華経』の「成仏」とは？

i 「ブツダ」も継続して「菩薩行」をしている。

ii 「涅槃」は今の時の現象

iii 「生死」は「菩薩行」に内包されているから、生きることも死ぬことも修行である。

iv ブツダとなるために、他のブツダに会うのではなく、共にブツダと修行をすることで同時の覚りを得る。

v 「絶対的信」による「智慧」の獲得（下種）こそ「真の菩薩行」である。（南無妙法蓮華経の唱題）

vi ブツダを絶対者として信仰するということよりも、常にブツダと同じ場所で、同じ時間で、同じ修行をし、同じ救済観を得る。（観心本尊抄の「今本時」）

vii 『法華経』では「仏に成る」のではなく、「共に仏を成ずる」信行論が重要となる。

viii（如来寿量品 「速やかに仏身を成就することを得せしめんと」
「二乗作仏」の「**作仏**」をどう読むか？
「作仏」↓「仏を作す」↓「仏の因・果の作用」？

・「二乗が仏乗になる」※二乗は方便でもともと存在しない
・「声聞・縁覚」それぞれに「仏乗」が作用する

※「作用」とは仏としての因果を作すこと

★次回の講義

- 1, 「法華三部經」について
 - ① 「開經」 ↓ 『無量義經』
 - ② 「本經」 ↓ 『妙法蓮華經』
 - ③ 「結經」 ↓ 『觀普賢菩薩行法經』
- 2, 『無量義經』について
 - ① 「徳行品第一」
 - ② 「説法品第二」
 - ③ 「十功徳品第三」